

藝大通信

GEIDAI TSUSHIN



22

MARCH 2011
TOKYO GEIDAI
東京藝大広報誌

古田亮

受賞教員インタビュー

「新連載」研究室探訪
音楽学部ピアノレッスン室

【新連載】卒業生に聞く

石上純也

【第五回】受賞学生インタビュー

寺嶋孝佳 三宅悠太 平田竜馬

【第十四回】教員は語る

八谷和彦 × 大塚直哉

【第三回】上野の寄り道散歩道「東京国立博物館庭園散策」

古田 亮

受賞教員インタビュー 第3回

展覧会ではなく本の形で世に問うた新しい宗達像。
刺激的な視点から書き下ろした『俵屋宗達』でサントリー学芸賞を受賞。

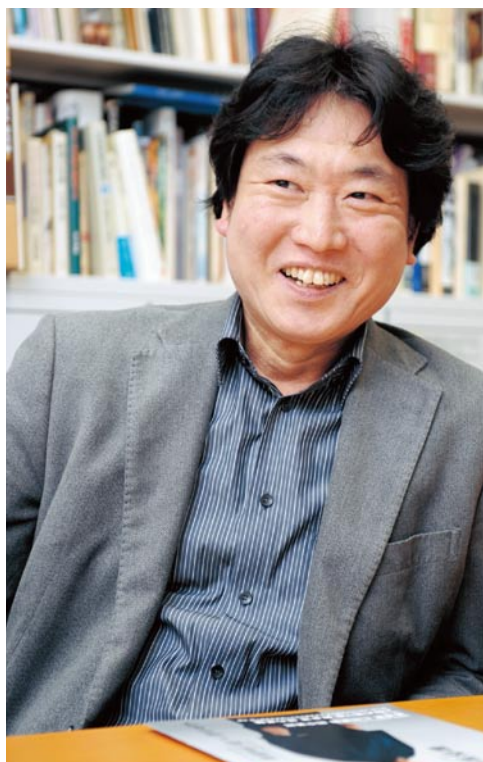


Photo by Tomoe Murakami

生きている宗達

私は研究者であるとともに、展覧会を通して自分が提起したいことを表現する学芸員でもあります。美術作品を展示してそこに塩胡椒を加えて、観る人に評価を委ねるのが展覧会です。二〇〇四（平成十六）年に「琳派 RIMPA 展」（東京国立近代美術館）を開催

したあと、次は日本の俵屋宗達とフランスのアリ・マチスの作品を並べる展覧会ができたかと思っていました。宗達に対してこれまでとは異なる見方ができるのではないかと。宗達が本質的にもっている芸術性や、なぜ近代になってから認められるようになったのかということも追究したい。しかし諸条件から、展覧会ではなく本の形での方が表現でき

ると思って書いたのが『俵屋宗達 琳の祖の真実』なんです。

現代の作家と話をしていますが、宗達の話になると止まらなくなる。決して過去のものではなくて、「宗達は生きている」と実感しています。明治以降の近代の画家たちが、自分たちの日本画を新しく描こうというときも、宗達や光琳、抱一が近代の日本画家たちにとって重要なイメージソースになった。過去の遺産を探したとき、はじめに尾形光琳を発見したけれど、光琳よりもさらに前に俵屋宗達があった。近代画家のモチベーションとリンクする人間的な画家がいたのです。その感覚はいまも続いていて、一般の人が「風神雷神」を見たときに感じる、わくわく感も画家の直観と同じなのではないでしょうか。

「気品が香る」日本美術を展示

サントリー学芸賞はあこがれの賞

第22号 目次

02 受賞教員インタビュー 第3回

古田 亮

04 geidai gallery 第2回

佐藤 一郎 黄山北海 石笋峰

06 教員は語る 第14回

八谷和彦×大塚直哉

09 受賞学生インタビュー 第5回

寺嶋孝佳 三宅悠太 平田竜馬

12 TOPICS

映旬 美旬 音旬

20 卒業生に聞く 新連載

石上純也

22 研究室探訪 新連載

音楽学部器楽科 ピアノレッスン室

24 上野の寄り道 散歩道 第3回

東京国立博物館庭園散策

26 上野の杜の波瀾万丈 第11回

東京音楽学校生の陸軍音楽隊入隊後篇

橋本久美子

28 展覧会&演奏会情報

香りがぐわしき名宝／和楽の美

30 NEWS2010.08 ～ 2011.01

編集後記



俵屋宗達《風神雷神図屏風》のうち「風神図」 江戸時代・17世紀 二曲一双 京都・建仁寺(国宝)

ですから、受賞の知らせを受けてほんとに驚きました。研究領域の蓄積が評価されるアカデミズムにおいては、専門分野に入りすぎて見えなくなってしまう部分がある。過去の専門家の研究を十分踏まえたう

えで、近代の美術史を見てきた人間からなに見えたかを提起したつもりです。最後に、大学



『俵屋宗達 琳派の祖の真実』(平凡社)

美術館でこの春に開催する「香りがぐわしき名宝」は、ぜひ皆さんにご覧いただきたい展覧会です。近代日本画で優れた作品を、「香り高い」と表現することがあります。では「香り高い」とはなにか。戦後、特に日本画の世界は造形に偏っている、かすかな香りを表現しようという世界観が忘れ去られてきたように思えます。もとをたせば日本文化のなかでは、香りは重要なファクターなのです。そこで香りと関係のある品々を展示して、「香りを描く」という不可能なことを表現者たちはどのように工夫してきたかを歴史的に追えるようにしました。ずっと温めてきた企画です。目には見えない香りに想像力を働かせて、絵に向き合っていたきたいと思うのです。

藝大通信

No.22

TOKYO GEIDAI

東京藝術大学広報誌

藝大通信 第22号

■編集発行

東京藝術大学 藝大通信編集部

■編集委員

松下 計(美術学部デザイン科准教授・編集長)

斎藤典彦(美術学部絵画科日本画准教授)

小鍛冶邦隆(音楽学部作曲科教授)

毛利嘉孝(音楽学部音楽環境創造科准教授)

筒井武文(大学院映像研究科映画専攻教授)

大石 泰(演奏芸術センター准教授)

■アートディレクター

松下 計

■表紙デザイン

松下 計

■表紙撮影

村上友重(美術学部附属写真センター)

■撮影

堀口宏明・川島保彦

■制作

株式会社 平凡社

■発行日

平成23年3月10日

■お問い合わせ先

東京藝術大学総務課

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

電話 050-5525-12026

FAX 03-5685-7760

E-mail toiawase@ml.geidai.ac.jp

URL <http://www.geidai.ac.jp/>

古田 亮(ふるた・りょう) 准教授 大学美術館

一九六四年東京都生まれ。八九年東京藝術大学美術学部卒業、九三年同大学院美術研究科博士後期課程(日本東洋美術史)中退。東京国立博物館美術課絵画室研究員、同館主任研究官を経て二〇〇六年より東京藝術大学大学美術館助教授(〇七年より准教授)。おもな企画展に「琳派 RIMPA」(東京国立近代美術館・二〇〇四年)、「岡倉天心―芸術教育の歩み」(大学美術館・二〇〇七年)など。二〇一〇年に『俵屋宗達 琳派の祖の真実』でサントリー学芸賞を受賞。なお、「香り かぐわしき名宝」は四月七日(木)から五月二十九日(日)まで大学美術館で開催される。







八谷和彦「OpenSky M-02」 写真：米倉裕貴

第14回

教員は語る

美術学部先端芸術表現科 准教授

八谷和彦

チェンバロとの出会い

八谷 ぼくは現代美術のなかでも「メディアアート」と呼ばれるジャンルに取り組んでいます。メディアアートはコンピュータやインターネット、あるいは電子機器といったものを使ったビデオアート以降の新しい芸術表現のひとつです。最近では、東京都現代美術館のコレクション展がシンガポールで開催され、「エアボード」というジェットエンジンを使った作品シリーズを展示してきました。こちらには「マシニング」系のものでも、ほかに「ボストペット」というメールソフトや、「視聴覚交換マシニング」という二人の人間が視覚を交換する作品を制作してきました。

ぼくはアーティストとしての活動に入る前、大学を卒業してから約七年間社会人として働いていた期間があります。「CII（コーポレート・アイデンティティ）コンサルティング」、いわゆる会社のブランドイメージをつくる仕事だったのですが、じつは勤めていた会社にある日チェンバロがやってきたというできごとがあったんです。チェンバロという楽器をまじまじと見たのはそれが初めてで、真四角な形をしていました。

大塚 それは珍しいですね。形が四角だったというのは、きつと「ヴァージナル」タイプの楽器ではないかと思っています。藝大の学生はもう少し時代が後の、グランドピアノの形に近い、「フリーユージュル型（翼型）」のチェンバロをおもに弾いています。

チェンバロの起源を探してみると、今でも「ダルシマー」や「ツインバロム」といった、張った弦を弾いたり、叩いたりして音を出すタイプの楽器が東欧にあります。これが日本にくる

と、人間の指に嵌めた爪で弦を弾く「箏」になり、西欧に伝わると、鍵盤を押すと木のジャックが動いてそこに挟まった爪が弦を弾く仕組みになったのではないかと、という説があります。史料的には、チェンバロについての一番古い記録はたしか一四世紀の終わりごろだと思っています。

ぼくがチェンバロをはじめたきっかけは、中学生の頃に遡ります。音楽の先生が、リコーダーを演奏し、「ヴァージナル」や「スピネット」といった古い鍵盤楽器を愛好する人だったんです。その先生が、中学校の音楽室にそういった楽器をもってきたことがあって、ピアノをやっていたぼくも弾かせてもらった。そして初めて聴いたその音色に魅せられたのです。チェンバロは、アンサンブルをするとき右手は即興で奏でます。ピアノ演奏の場合は、なによりも楽譜を読み音をさらうことから始まるのですが、チェンバロは右手を和音に合わせて即興的に音を考えて弾くことがアンサンブルの基本になる。そうした奏法がまた楽しいと思ったんです。しかも後に好きになったヨハン・セバスティアン・バッハという作曲家がチェンバロ曲を数多く書いていたということもあり、次第にのめりこんでいくことになりました。

作家に必要な持久力

八谷 藝大のプログラムのなかに外部からゲストを招いて行う特別講義というのがあって、ぼくも何度か教えることができました。同世代の現代美術家の友人にも、藝大出身者が多いですね。

藝大との個人的なかわりでは最近こんなことがありました。東京音楽学校（藝大音楽学部の前身）でヴァイオリンを学んでいたぼくの義母の従妹が、留学先のウィーンで亡くなってい

大塚直哉

音楽学部器楽科（古楽）准教授

藝大への期待・抱負・提言



「クラヴィス 〜鍵〜」大塚直哉（クラヴィコード／チェンバロ／オルガン）

るんです。でも義母は一度もお墓参りに行ったことがないというので、去年一緒に参りしてきました。

オーストリアのリンツで開催された「アルスエレクトロニカ」というメディアアートのフェスティバルに参加した後、ウィーンまで足を延ばしました。ウィーンの中央墓地というのは、モーツァルトやベートーヴェン、ヨハン・シュトラウスといった作曲家のお墓があり観光地になっているのですが、その隣りに公園のような市民墓地があります。義母の従妹の岩田聖子さんはそこに葬られていました。留学して数年後の一九五八年に二九歳で亡くなられたそうです。戦後まもなくのことで、当時はウィーンへ行くのにもたいへんな時代だったと思います。このお墓参りがばくと藝大のとても不思議な縁だと思いました。

大塚 それは、とても不思議な縁ですね。ほかの場合、藝大在学中にオランダのアムステルダム音楽院で学んだものの、藝大大学院修了後すぐに助手として残ったので、日本ではずっと藝大のお世話になっています。

自分が学生のころと比べると、いまは学部生でも積極的に海外へ行くようですし、ずいぶんしっかりしているように見受けられます。美術もそうだと思いますが、演奏というのは結果が出るまでの期間がかなり長いのです。同じことを繰り返して、それを積み上げていかないと一〇年後、二〇年後というものがないわけです。そういうことを我慢する持久力をもっと必要かもしれませんね。

藝大の音楽教育システムは、フランスの音楽院の仕組みに倣ったもので、学生を入学させるときにとても厳しくその才能を判断する。その結果を経た学生を、責任を持って育てていくという仕組みなんですね。一方、ばくが留学した

オランダでは、可能性のある生徒はできるかぎり採るような比較的緩めの入学試験をする代わりに、一年後の試験での伸び具合を見てどんどん落としていく。そして卒業試験はかなりシビアな審査をしています。そういった入り口と出口に対する感覚が違うことで、学生のモチベーションの引き出し方も異なっているのではないかと思います。善し悪しは別にして、オランダの教育システムはいろいろな側面で現実的、というか現場主義的な傾向があるかもしれません。

聴こえない音が生みだす世界

八谷 ばくがふだん聴く音楽は、知り合いのといふことが多いですね。たとえば友達のミュージシャンがライブハウスで演奏をして、そのときに一緒に出た人のCDを買ったり、ライブを聴きに行ったりというようにつながっていくわけです。プレーヤーとしては、基本的に現代の日本に住んでいる人たちが、同世代の人たちなんですけれども、いわゆるメジャーと呼ばれるミュージシャンとはかぎりません。

ところで大塚先生の出されたこのコンパクト・ディスクは普通のものに比べて、かなり広い周波数まで録音することを意図してこの形式（DSD／ダイレクトストリームデジタル）にされたのではないのでしょうか。なぜそんなことを聞かといひますと、チェンバロの音を初めてCDで聴いたときに、録音とライブとではずいぶん印象が変わる楽器ではないかという印象をもったからなんです。

大塚 まさにおっしゃるとおりですね。生演奏と録音の差がかなり大きい楽器のひとつで、マイクにものりにくいと言われます。形も左右対称じゃないですし、響きが豊かな楽器の特性を録音でうまく捕まえるのは難しいようです。響

きを追いすぎると、べたべたな響きになってしまふのでしょうか。コンパクト・ディスクをひとつの作品として仕上げようとするとき、シャープさやクリアさを求めるか、あるいはチェンバロの音色が本来もっている温かさやオリジナルに対する忠実さを求めるかで、だいぶ印象が変わってくるのだと思います。

八谷 以前、ガムランの生演奏を聞いたとき感動して涙が出たという経験があるんです。当時「日本バーチャルリアリティ学会」というところに所属していて、その学会員である大橋力（山城祥二）先生が、「芸能山城組」というガムランの演奏集団を主宰されていたんです。大橋先生の研究の一環としてガムランを聴かせていただいたのですが、周波数の関係上、録音ではカットされてしまうレヴェルの音があることを知りました。たしかに耳には聴こえないにもか



かわらず、エモーションにはすごく影響を与えていることを自分でも実感できたんです。

それ以来、人間の可聴域を超えるような音を出す作品をつくりたいと思い、一九九七年からジェットエンジンを使った作品をつくり始めました。最初、参考に模型用の小型のジェットエンジンを見にいったら、始動するときは音が聴こえているのに、どんな音が聴こえなくなっていく。展覧会というのは生の体験を観客に提供できる場所でもあるので、そこで動作するジェットエンジンを見ればおもしろいのではないかということ、それ以来ジェットエンジンを使った作品を継続しています。

アーティストのあり方と社会

八谷 ぼくが藝大に招かれた理由のひとつに、社会人としての経験を有していることがあると自分なりに捉えています。藝大を卒業しても、全員がプロのアーティストになれるわけではないにせよ、ここで学んだスキルは、一般の会社やNPOのような組織に入っても生かせる部分があると思うのです。そのうえで、マーケティングの基礎や企業のあり方といったことをある程度知っておくのは、アーティストとして社会で活動するときには有利なのではないでしょうか。

たとえば「アントレプレナーシップ（起業家精神）」のようなものは、アーティストの心情とあまり変わらないと思うんですね。アートでも、世界を変えてやろうという志がある人のほうが、成功するところがある。学生に起業しなさいと勧めているわけではないのですが、学校で習ったスキルが社会に出たら役に立たないなどとは思わないでほしい。学生のうちはどうしても、将来の不安があるのはたしかでしょう。でもいま先生から教わったり、日々作

品を創るという行為は、君たちの人生にとっていつか役に立つことなんだとわかってもらえるような授業にしたいと思っています。

大塚 いろいろな意味で音楽家として、人間としての「基礎体力」が高いということは、音楽家として長続きするうえで非常に重要なことなのではと感じています。

何が音楽家の「基礎」なのかということは難しい問題です。音楽家としての「基礎体力」のなかにはもちろん演奏技術が高いこととか理論的・知的な作品の把握力が高いことなども含まれるでしょうが、それに加えてじつは「勘のよさ」というのもあるような気がしてしょうがないのです。「空気を読む」というとあまりにも下世話な感じがするかもしれませんが、作品に対して、アンサンブル仲間に対して、聴衆に対して、目に見えないものや説明できないことをつかむ感覚の鋭い学生がいるものなんです。そういう才能をうまく見つけて育てていくことが僕らの大事な役割ですし、またそれらを磨いていくメソッドというのが伝統的に日本にはあるので、そこからも多くを学べるような気がしています。

ぼくが取り組んでいる古楽というのはもともと、自分が時代を共有していない音楽に対してもつと謙虚に接してみようという、演奏家の「姿勢」のようなものだったといわれています。それはどの時代にも応用が可能で、こういった古楽的な発想や演奏法は、もしかしたらこれから音楽家としての基本のなかに含まれていくのではと思っています。つまり演奏家としての自分の身の丈に作品を合わせるのではなく、まずは自分のほうから過去の作品に近寄っていくとする姿勢といえるでしょうか。こういったアプローチは、一見後ろ向きに見えるかもしれませんが、じつは新しいものを生み出す力を秘めていると思っています。

八谷和彦（はちや・かずひこ）
美術学部先端芸術表現科——准教授

一九六六年佐賀市生まれ。九州芸術工科大学（現九州大学芸術工学部）画像設計学科卒業。個人TV放送局ユニット「SMTV」、コンサルティング会社勤務を経て現在に至る。

作品に《視聴覚交換マシン》や《見ることは信じること》などの特殊コミュニケーション・ツール・シリーズ、ジェット・エンジン付きスケート・ボード（エアボード）やパーソナルフライトシステム（オープンスカイ）など。メールソフト（ポストベットの開発者であり、ポストベットの関連のソフトウェア開発とディレクションを行う会社「ポストベットの設立者でもある」。

主な個展に「見ることは信じること」（広島市現代美術館・一九九六）、《Ogo's》八谷和彦展「ポストベットのメロウエまで」（熊本市現代美術館・二〇〇三）、「八谷和彦・Ogo's NO.1」（NTTインターコミュニケーション・センター・二〇〇六）、「魔法かもしれない。」（日本科学未来館・二〇〇八）ほかがある。二〇一〇年より現職。

大塚直哉（おつか・なおや）
音楽学部器楽科（古楽）——准教授

東京藝術大学音楽学部楽理科を経て同大学院音楽研究科博士後期課程音楽専攻鍵盤楽器（チェンバロ）修了。アムステルダム・スウェーリンク音楽院チェンバロ科及びオルガン科卒業。アムステルダム郊外の聖ウルバヌス教会のオルガニストを務めたほか、ヨーロッパ各地で演奏活動を行う。一九九九年暮れより東京に拠点を移し、「アンサンブル・コレディエ」「パッハ・コレギウム・ジャパン」などのアンサンブルにおける通奏低音奏者として、またチェンバロ、オルガン、クラヴィコードのソリストとして活躍。

東京藝術大学、神戸松蔭女子学院大学、国立音楽大学および彩の国さいたま芸術劇場オルガン講座、姫路パルナソスホールチェンバロ講座講師。「アンサンブル・コレディエ」音楽監督。宮崎県立芸術劇場オルガン事業アドヴァイザー、台東区旧楽堂事業アドヴァイザー。二〇一〇年より現職。

藝大の在校生・卒業生は、
公募展やコンクールで栄誉ある賞を受賞し、
また各分野の最前線で活躍している。
若き才能がふだんの努力とさらなる意欲を語る。

第26回 2010日本ジュエリーアート展 優秀賞

寺嶋孝佳

◆美術学部工芸科(彫金)4年

ぼくは高校(東京学館総合技術高等学校。現・東京学館船橋高等学校)のときから工芸科に通っていました。工芸科に進んだのはじつはたまたまで、当時その高校に普通科がなかったからなんです。そもそもバレーボール部が強い学校だったのが進学の原因で、バレー部では「春高(全国高等学校バレーボール選抜優勝大会)」やインターハイにも出場し、キャプテンも務めました。

もともと図工は好きだったものの、「工芸」のイメージというと、陶芸や木工のイメージしかありませんでした。工芸科で学ぶうちに金属という素材に魅力を感じるようになり、高校の卒業制作では金工を選びました。金属は磨くことによって、ピカピカにもザラザラにも加工することができる。また溶かしたり、叩いたり、削ったり表現に幅があって、ガラスや土よりも惹かれるものがありました。高校3年生の夏、バレー部がインター

ハイで負けて進路に迷っていたとき、藝大を卒業した工芸科の先生方に、藝大進学を薦められました。入学を果たせて、その高校を卒業した初の藝大生になったときは、先生方も自分のことのように喜んでくれました。

藝大での4年間はとても充実していました。創作に集中する環境や設備が整っているうえに、先生方も学生と同じ空間にいてくださるので、迷ったときはすぐ相談にのってもらえる。きっと工芸の世界ならではの、背中を見て学べ、技術は盗むものであるという技術継承の伝統を引き継ぐものなのでしょう。藝大での学生生活をとおして、新しいものを追おうとして壁にぶちあたったときは、考えこまず、手で作業をしながら糸口をつかむものだということを学ぶこともできました。

今回優秀賞を受賞した「日本ジュエリーアート展」は、第26回という数字が物語るように、とても歴史のある公募

展なんです。ぼくは当初「アンダー26」という年齢制限がある部門に応募したのに、一般部門で優秀賞をいただいたのは大きな驚きでした。

ぼくは金属を使ってオブジェをつくることもあります。いまはジュエリーが中心です。ジュエリーのよさは、身につけて、外にも持って出かけられるという点です。そして、部屋に置いて、小さな彫刻として鑑賞することもできる。ぼくの作品は「動くジュエリー」というのが特徴で、受賞作もジュエリーの一部が動いて形が変わるんです。手に持って遊び、動かして楽しむ、変身のおもしろさ。モチーフの根底には、子どものころに見ていたロボットアニメや戦隊もののヒーローがあるかもしれません。

思いもよらぬ動きに“ワクワク”する感じや変化する驚きを、ぼくと共有してもらえる作品をつくり続けていきたいですね。



寺嶋孝佳 「Transforms」

てらじま・たかよし

1986年千葉県生まれ。2007年東京藝術大学工芸科入学。2009年「第10回全日本金銀創作展」で全国伝産金工組合協議会会長賞を受賞。2010年に「2010日本ジュエリーアート展」で優秀賞を受賞。

第79回日本音楽コンクール作曲部門第1位

三宅 悠太

◆大学院音楽研究科修士課程作曲専攻2年

実家に古いリードオルガンがあって、幼稚園のころから簡単な即興演奏を家族に聴かせたりしていました。小学校に上がってからも、楽譜にはうまく書けなくても和音からメロディーをつくるようなことはずっと続けていました。中学1年生のとある日、なんとなくテレビを観ていた時にX JAPANの「Forever Love」が流れていて、その音楽にこれまで感じたことがない全身がゾクゾクするような感動を受け、目覚めてしまったんです。音楽は凄いな。こんなことができるのなら作曲家になりたいと突き動かされました。それからX JAPANの曲を耳で覚えて弾いたり、パソコンのDTM（デスクトップミュージック）を使って作曲をしたり、合唱部に入ってさらに音楽に触れるようにもなりました。

藝大に進もうと思ったのは、クラシックをあまり知らないのがコンプレックスでしたし、ポピュラー音楽にばかり触れていると、どうしてもその枠の中にはまってしまうと危惧したからです。X JAPANのリーダーのYOSHIKIもその

ころ好きだった坂本龍一も、クラシック音楽をルーツにしている。将来どんな音楽の分野へ行くにせよ、クラシックを学んで自分の音楽性を深め広げたいと思いました。

藝大では、芸術に対してさまざまな価値観をもって日々闘っている仲間からいろいろな刺激を受けて過ごせたということが、一番の思い出でもあり収穫でした。また、作曲家は演奏家というフィルターを通して内なる音楽を“表出”するわけですから、レヴェルの高い奏者が集まる藝大では、演奏家から多くの学びを得ることができました。

第79回日本音楽コンクール作曲部門第1位を受賞した《打楽器独奏とオーケストラの為の「響奏」》は、木質・膜質のさまざまな打楽器をソリストが独奏し、オーケストラと時間を共生し響きを奏でていく曲です。作曲した当時は「間」の緊張や響きの空間性（余白）のようなものに強く惹かれていて、それを打楽器独奏とオーケストラという形態で具現化できたら何か面白い音楽が生まれるかも

しれない、と思いました。歴史的にはあまり書かれていない編成でしたが、作曲する時は自分自身が新鮮でないと嫌ですし、未知なるものをつかまえてみたいという気持ちが強かったですね。音楽はある意味時間を束縛する芸術ですから、緊張感の途切れない切りつめた時間をつくり上げたいという一心で、作曲に臨みました。歴史あるコンクールでの第1位は、嬉しさと同時に“妙な”気持ちが湧き起こりました。未熟な自分がこういう立場になっているのが不思議で、教育実習で母校に行った時の心境とまるで同じ。これからも地道に音楽・人と向き合い、学んでいこうと思いました。

最近では、例えばブータンの仏教音楽や、地声で歌われる土俗的な民謡など、西洋音楽のように淘汰されていない生々しい音楽のほうに心が惹かれます。それが作品の創作にどうかかわってくるかは未知数ですが、自分にとっての真実と対峙し続け、そうして生まれた作品が誰かを豊かにすることに繋がっていったら、それが私にとって一番の幸せです。



三宅悠太作曲《打楽器独奏とオーケストラの為の「響奏」》楽譜

みやけ・ゆうた

1983年東京生まれ。2001年国土交通省CM音楽公募において優秀賞受賞、翌年T V・ラジオ放送。2005年第16回奏楽堂日本歌曲コンクール作曲部門第1位入賞。2010年第79回日本音楽コンクール作曲部門（オーケストラ作品）第1位入賞、併せて明治安田賞および岩谷賞（聴衆賞）受賞。東京藝術大学音楽学部作曲科をアカンサス音楽賞および同声会賞を受賞して卒業後、現在、同大学院音楽研究科修士課程作曲専攻在学中。現代音楽をはじめ、舞台音楽、合唱・吹奏楽の作編曲、合唱指揮・指導などにも力を注いでいる。聖心女子大学教育学研究室授業助手。朗読表現団体「声の会」専属舞台作曲家。





ひらた・りょうま

1984年奈良県生まれ。2007年関西大学商学部卒業。2009年東京藝術大学大学院映像研究科修士課程映画専攻（映像制作技術・編集領域）修了。2010年大学院映像研究科映画専攻編集領域の教育研究助手を務めるとともに、フリーの映像編集者として活躍。編集作品に「ラッシュライフ」、「イエローキッド」、「よるのくちぶえ」などがある。「イエローキッド」（2009年・真利子哲也監督）は、2009年バンクーバー国際映画祭、2010年ロッテルダム国際映画祭、2010年香港映画祭コンペ部門の招待作品となった。



「イエローキッド」より

「イエローキッド」

2009年バンクーバー国際映画祭招待／2010年ロッテルダム国際映画祭招待

平田 竜馬

◆大学院映像研究科修士課程映画専攻修了

関西大学に通っていたころから、学外にサークルをつくり、自主映画を撮り始めました。ぼくは奈良県の出身で、高校時代は野球部に所属。自主映画サークルは、野球部の仲間呼びかけてぼくが立ち上げたものです。

映画が好きになったきっかけは、小学校を卒業したてのころに友達と「トイ・ストーリー」を観にいったことでした。親に伴われずに映画館で映画を観たのはそれが初めてのことで、以来映画にはまってしまいました。家の近くには映画館がなかったので大阪まで出かけて、単館系の映画にも足を運びました。洋画よりも邦画が好きで、高校生のころにはもう将来は映画の仕事に就きたいと思い始めていましたね。

ぼくは井筒和幸監督の映画が好きで、「岸和田少年愚連隊」（1996年）は何回も観ました。井筒監督作品のよさは、土着のもつリアルさがとてもよく表現されているところです。笑いを得るために多

少大袈裟に写しても、リアルであるということを絶対に崩さない。「パッチギ！」（2004年）でもそうです。

大学時代には自主制作映画を5本つくりましたが、監督と脚本、撮影、編集をぼくひとりが兼ねていました。藝大大学院映像研究科の創設（2005年）を知ったのは大学在学中で、卒業後に進もうと思ったのは自然ななりゆきでした。7つに分かれた専門領域から編集領域を選んだのは、自主制作映画をつくる作業のなかで編集がいちばん楽しかったからです。

映画における編集の仕事は、撮影現場で監督を含めたスタッフがつくってきた上映時間の3～5倍ある映像を、最終的に上映する形に仕上げる役割を果たします。ナマの素材に触れられるのはとてもやりがいがあることですし、大きな責任も負います。監督の意図とすりあわせるディスカッションは連日にわたり、編集の立場から、現場の人間では気づいて

いないアイデアを提案していく。制作スタッフのなかで、映像がもっている力を客観的に見られるのは編集のぼくだけです。その誤差を埋めることがディスカッションの中心になります。「イエローキッド」で真利子監督といちばん議論したのは、「間」のつくり方でした。カット尺の長さやテンポの置き方は映画を感じるときに大変重要な部分ですから、徹底的に話し合いましたね。

映画編集者として懂れているのは鍋島惇さんです。山本薩夫監督の文芸大作から日活ロマンポルノまで幅広く手掛けた方で、ドキュメント映画の傑作「ゆきゆきて、神軍」（原一男監督・1987年）は編集の力というものをまざまざと感じさせてくれる作品でした。

「イエローキッド」は、世界各地の国際映画祭に招待され、劇場公開もされました。これからも刺激的な素材と出合い、おもしろい映画をつくっていきたいと思っています。



オープンシアター 2010
3専攻そろっての初の上映イベント

1



日韓プロデューサー・ワークショップ
映画専攻

2



3

電通コンテンツ産業寄附講座
『ノルウェイの森』の世界観
メディア映像専攻

TOPICS OF
FILM AND
NEW MEDIA

2010.08-2011.01

映旬

1

オープンシアター 2010

九月十六日から二十日まで、横浜キャンパス馬車道校舎において、大学院映像研究科3専攻による「オープンシアター 2010」が開催された。

横浜市との共催で文化芸術創造都市づくりの推進事業に位置づけられる本イベントは、例年、映画専攻単独で開催されてきたが、今回より3専攻そろっての初の上映イベントとして開催することとなった。会場では、映画専攻及びメディア映像専攻から、これまでの作品群からのセレクトプログラムが、アニメーション専攻からは第一期生修了作品および第二期生の一年次作品が上映された。また、上映にあわせ、映像研究科教員と修了生によるトークイベントも開催された。

2

日韓プロデューサー・ワークショップ

◎映画専攻

八月三日から六日まで、箱根の強羅静雲荘(文部科学省共済組合宿泊所)にて、韓国映画アカデミー(KAFA)と映画専攻のプロデューサー・コース学生らによる「日韓プロデューサー・ワークショップ」が合宿形式で行われた。

平成十九年より始まったこのワークショップは、今後増大が見込まれる映画の国際共同制作に関する実践的な教育を行うこと、日本映画の



4

第13回広島国際アニメーション フェスティバル

アニメーション専攻

藝大アーツ イン 東京丸の内 「藝大アニメーション・音・ステージ」

アニメーション専攻

5



3

電通コンテンツ産業寄附講座 『ノルウェイの森』の世界観

◎メディア映像専攻

港区の電通本社ビル内電通ホールにて十一月二十九日、電通コンテンツ産業寄附講座「『ノルウェイの森』の世界観」が開催された。

この寄附講座は、五年前から協定を結んだ電通と大学院映像研究科の産学連携事業のひとつで、電通「Designトーク」との共同企画シリーズに位置づけられるものである。

本講座は、十二月十一日に公開する『ノルウェイの森』の特別試写と、この映画の監督であるトラン・アン・ユン氏をゲストに迎えて、桂英史教授とのトークセッションが行われた。会場からの質問も交えて、監督本人から直接お話を伺える貴重な機会となった。

4

第十三回広島国際 アニメーションフェスティバル

◎アニメーション専攻

八月七日から十一日まで、広島県広島市のア

ステールプラザにおいて、第十三回広島国際アニメーションフェスティバルが開催され、アニメーション専攻第一期生の修了作品十一本と第二期生が一年次に制作した作品十一本が出品され、うち三本がコンペティションに入選し、三本が優秀作品として上映された。

会場内のエデュケーション・フィルム・マーケットでは、アニメーション専攻のブース出展を行うとともに、学生セミナーとして、山村浩二教授による講演「学校でアニメーションを学ぶこととは」プロダクションとしての教育機関」を開催し、好評を博した。

5

藝大アーツ イン 東京丸の内 「藝大アニメーション・音・ステージ」

十月二十六日、千代田区の丸ビルで開催された「藝大アーツ イン 東京丸の内」にて、アニメーション専攻による「藝大アニメーション・音・ステージ」が実施された。

舞台上で生の音楽やセリフを上演しながら、アニメーションを見ながら、ふだんとは異なるアニメーションの新しい楽しみ方を実現したこのステージでは、ウィンザー・マッケイの「恐竜ガーター」をはじめ、当専攻修了生とデザイナー専攻修了生の作品を含む計五作品を上演。ピアノや打楽器の演奏のほか、尺八、三味線や長唄といった邦楽の演奏との組み合わせなど、アニメーションと音楽のユニークなコラボレーションが繰り広げられ観客を魅了した。

TOPICS OF
FINE ARTS

2010.08-2011.01

美旬



「こよみのよぶね」



路上でのワークショップ



「隅田川 Art Bridge展」

GTS (藝大・台東・墨田) 観光アートプロジェクト

1



「Memorial Rebirth」



GTSのロゴ



「東京スカイツリー®を描く絵画展」



「マケット・プランニング展」

1

GTS（藝大・台東・墨田） 観光アートプロジェクト

本学と台東区、墨田区の共催による地域連携事業「GTS観光アートプロジェクト」が、十月から十一月にかけて隅田川を挟み浅草の東本願寺から東京スカイツリー®を結ぶ地域を舞台に開催された。このプロジェクトは国際アートプロジェクトとアート環境プロジェクトの二つの事業を軸として構成され、国際アートプロジェクトでは「隅田川 Art Bridge2010」として、前記の地域に展覧会場を点在させ、本学の専攻分野を超えた複合チームにより、地域住民の参加によるワークショップや外国の協定大学および関連芸術機関と連携した展覧会など、さまざまな企画内容で実施された。

また、アート環境プロジェクトでは東京スカイツリーのビューポイントに設置する環境アート作品の制作に先立ち、模型による「マケット・プランニング展」が開催された。そのほかに、小中学生を対象としたワークショップと区民から募集した作品による「東京スカイツリーを描く絵画展」および東本願寺などを会場として四つのコンサートなどが実施された。



モザイクの真実 ―世界遺産ガッラ・プラチディア廟モザイクの保存と修復―

右：レプリカによるモザイクの公開制作 左上：シンポジウム 左下：亀裂の入ったモザイクのディテール修復前（左）と修復後

2

モザイクの真実

―世界遺産ガッラ・プラチディア廟 モザイクの保存と修復―

十一月三日から二十日まで、イタリア文化会館において、世界遺産ガッラ・プラチディア廟モザイク壁画の現状調査と修復事業の研究成果を展覧会とシンポジウムで発表した。

本研究は、本学壁画研究室とラヴェンナ建築文化財景観局・ラヴェンナモザイク修復専門学校が共同で、二〇〇五年から二〇一〇年の六年間にわたり主に文部科学省科学研究費補助金を受けて行ったもので、保存修復技術の研究とともに現地における詳細な調査の結果、多くの新しい発見があり、ローマ末期のモザイク研究において貴重なデータを得ることができた。

2

3

東京藝大トランス WEEKS

美術学部絵画棟大石膏室の Art Space1 と Art Space2 において、十月二十九日から十一月十七日まで、「東京藝大トランス WEEKS」が開催された。本展は、現代アートを中心に新しいアートの可能性を提示する東京文化発信プロジェクトとの連携で開催されたもので、本学教員らで組織された選考委員によって選定された本学学生および卒業生の絵画、立体、映像や石膏像と本学教材の動物剥製などを対置させたインスタレーションなどの作品が展示された。

なお本展では、二年にわたる絵画棟耐震改修工事によって、アトスペースが併設された新たな大石膏室のお披露目も兼ねて行われた。



藝大デザインプロジェクト2010
「藝大デザインプロジェクト2010」成果発表展チラシ

4



東京藝大トランス WEEKS
大石膏室での展示風景

3



彫刻アートプロジェクト「時空の街ー笑いー」展
上：春風亭一之輔師匠 下：下谷神社内の会場

5

藝大デザインプロジェクト2010

十月十九日から二十一日まで、港区のクレアール青山アートフォーラム第二展示場において、「藝大デザインプロジェクト2010」成果発表展が開催された。平成二十一年度から始まったこの試みは、東京都交通局と連携・協力し、都営交通をテーマに修士課程デザイン専攻の一年生約三十名が、専門領域を横断した五チームに分かれ、地下鉄、バス、路面電車、新交通システムなど交通局の現場をリサーチし、「提案型の問題解決」を行うという実践的なプロジェクトとなっている。成果展では、あつたらしいいなを素直に形にした、学生ならではの柔軟かつ大胆な発想の数々が展示された。

4

彫刻アートプロジェクト

「時空の街ー笑いー」展

十一月一日から七日まで、台東区の下谷神社にて彫刻アートプロジェクト「時空の街ー笑いー」展が開催された。本展は、浅草の街を中心に四年間にわたり開催されてきたもので、共通するキーワードは「街」と「人」。街に暮らす人間表現のなかに彫刻の本質を求め、本学彫刻科と地域との連携を通して新しい彫刻の探究が行われてきた。今回は会場を寄席発祥の地である下谷神社とし、お題目は「笑い」。七人の若手落語家と二人の落語会を代表する人物を彫刻科学生が取材し、その人となりを捉えた彫刻を制作し展示した。会期中には、展覧会とともに落語会や落語家を招いたギャラリートークも開催された。

5

音旬

1

藝大オペラ第五十六回定期公演

「イル・カンピエツロ」全三幕

奏楽堂において十月九日と十日の二日間、藝大オペラ第五十六回定期公演「イル・カンピエツロ（小広場）」が上演され、満場の観客が藝大オペラに酔いしれた。

藝大オペラの歴史は古く、一九五六年（昭和三十一年）に第一回オペラ公演「椿姫」が上演されて以来、今日まで途絶えることなく公演が行われてきた。本学のオペラ公演は、総合的にオペラ歌手としての研さんを積んだ修士課程の学生および教員が中心的なキャストを務め、藝大フィルハーモニア、学部生の合唱を伴い、衣装、舞台装置に至るまで本格的な舞台づくりの成果を遂げており、各方面から人気の高い公演を行っている。本邦初演の作品も多く、学生にとって大変意義深いものとなっている。

今回の藝大オペラは、二〇一一年十月初旬に「コジ・ファン・トゥッテ」を予定している。

2

第四回藝大ミュージックフェスタ

十一月六日と七日の二日間にわたり、千住キャンパスにて、アトリエゾンセンター（ALC）が主催する「第四回藝大ミュージックフェスタ」が開催された。

ALCでは年間を通じ足立区と連携して芸術事業を行っているが、秋のフェスタはそのなかでも規模が大きく、幅広い世代の方にお楽しみいただけるプログラムが展開された。「室内楽コンサートシリーズ」では、打楽器アンサンブルのほか七公演の多様なコンサートを開催。「おとあそび」親子音楽ルーム」には、たくさん子どもたちが訪れ、自由に楽器に触れるなど思い思いに音楽を楽しんだ。邦楽体験ワークショップ「親子で体験！和楽器」では、参加者が箏、尺八、三味線を体験。また、アニメーション専攻の作品を上映する「アニメーションのための小さな映画館」も催され、来場者はそれぞれに芸術体験を楽しんだ。

3

千住 Art Path 2010

十二月十八日と十九日、音楽学部音楽環境創造科・大学院音楽研究科音楽文化専攻の学生によるオープンプロジェクト「千住 Art Path 2010」が、取手キャンパスから移転して今年で五年目を迎えた千住キャンパスで開催された。

本プロジェクトは、千住キャンパスを拠点に日々制作や研究に励む学生たちによって毎年二日間に行われる開催されている発表会であり、音楽環境創造科が取手キャンパスに展開していた当時から行われていたもの。音楽制作・アートマネジメント・録音／音響・舞台芸術・文化研究と多岐にわたる専門をもつ学生たちが、アートにおけるジャンルや領域の壁を越えて、それぞれの制作や研究の成果を発表する機会であるとともに、豪華ゲストによるトークやサラウンドの公開録音などのイベントを行った。

4

藝大スペシャルアート

「障がいを超えてみんなで楽しむコンサート」

十月二十四日、音楽学部第一、六ホールを中心に藝大スペシャルアート「障がいを超えてみんな楽しんで楽しむコンサート」が開催された。

この企画は、障がい者も健常者も分け隔てなく楽しめるアートとは何か、そしてそれを実現するために藝大として何ができるかを考える初めての試み。今回は特に知的障がい者とともに楽しむアートに注目し、美術と音楽の学生たちが自ら企画を考え、教員がサポートするというかたちで準備が進められた。特別支援学校の生徒の作品が展示された「アソビト（遊びと）アートの部屋」や障がい者と健常者の即興演奏が行われ、従来の「音楽」とは異なる新鮮な響きで会場を満たした「みんなで楽しむコンサート」などが催された。



©TAKE-O

藝大オペラ第56回定期公演
「イル・カンピエッロ」全3幕
東京藝術大学奏楽堂

1



藝大スペシャルアート
「障がいを超えて～みんなで楽しむコンサート」
音楽学部第1,6ホール

4



第4回藝大ミュージックフェスタ
邦楽体験ワークショップ。千住キャンパス

2



千住 Art Path 2010
サラウンド公開録音風景。千住キャンパス

3

石上純也

「巨大さがひろがりのなかに
溶けていく建築」



東京藝大の自由な環境

藝大の大学院では益子義弘先生の研究室で学びました。

建築家としてのいまの自分につながっていることといえば、たまたまなんですが、中山英之さんや安宅研太郎さんや中村竜治くんといった面白い人達が近い学年にあつまっていて、いろいろ建築について話せたことかなと思います。

益子先生の指導を受けることにしたのは、さまざまな考え方に対してオープンな授業のスタイルだと聞いていたからです。当時はまだどういう方向で建築をつくっていくのか定まっていなかったたので、柔軟な環境で勉強するのがいいと思ったのです。仲間に恵まれたこともあり、有意義な学生生活を送ることができました。

建築における「あたらしさ」とは

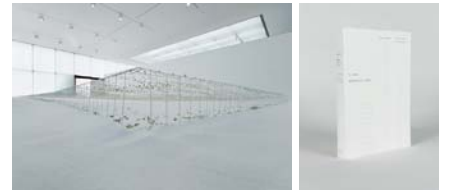
豊田市美術館の展覧会(二〇一〇年九月一八日―十二月二六日)は「建築のあたらしい大きさ」というタイトルですが、「あたらしさ」というのは、建築にとつて必然的なものであるとぼくは考えています。

建築は永続的なものであると同時に、ぼくらの生活と密接につながっていないといけない。しかし、生活というものは日々少しずつ変わっていくもので、建築の様式や空間のあり方、仕組みといったものも、少しずつその都度変化していく。住宅のように生活にものごく結びついていて、あまり変化がないように思われているものでも、半世紀前と今とでは求められているものが全く違います。

ぼくは、常にあたらしく変わり続ける現在の生活スタイルや機能や目的といったものに対して、建物をやわらかくフィットさせていくことをやっていきたい。だから、「あたらしさ」というものを、たんに奇抜であるとかいうことではなくて、建築のなかに必然的に備わり必要とされる、とても自然な当たり前の要素のひとつであると考えているのです。

また一方で、いま、時代は過去のどの時代とも違った次元に入りつつあるように思います。世の中が、日々の小さな当たり前の変化を超えた大きなパラダイムシフトのなかにあるように思うのです。というのも、ここまで自由に建築を考えられた時代はなかったのではないかと感じているからです。一般的に、建築は社会と結びつき、そこに根拠を求めることが多い。しかしながら、現在の社会のシステムは、それ自体がものすごく複雑化し、多くの情報が雨のようにランダムに降

左：石上純也「地平線をつくる」
photo:Yasushi Ichikawa
右：『石上純也 建築のあたらしい大きさ』
(青幻舎刊)



り注ぐ世界の中にある。つまり、そこからフィードバックしてくるものから、だれもが共有できる明確な未来像というものを、ひとつの理想的な社会として描き出すことが難しくなってきた。そういったなかでは、建築の形式を自由に開放していかねければ、逆に建築が社会との接点を見失ってしまうのではないかと考えられる気がします。

大きく変わりつつある時代に対しての「革新性に繋がるあたらしさ」と、日々少しずつ普遍的に変わり続けていく日常を僕たちに馴染ませるための「自然さに繋がるあたらしさ」。このふたつのあたらしさは、多くのなかでは建築の根源的な部分です。

「半屋外」建築の可能性

豊田市美術館でも模型を展示した「地平線をつくる」は、ある大学から「学生がリラックスできる場所をつくってほしい」と依頼されて設計しているものです。建物とも広場ともいえる多目的施設で、半屋外が九五パーセント、屋内が五パーセント。柱は一本もなく、一〇ミリから五〇ミリの極薄の人工地盤を用いて、自然環境と人工環境の中間に位置するものをめざしています。

このような「半屋外」建築の可能性について考えるとき、スケール感というのは非常に重要だとよくは考えています。およそ七〇〇平米という建築の面積がもつ大きさのいっぽうで、天井高は二・三メートルと住宅のような親密感を兼ね備えています。大きさと小ささが共存する、「あたらしい広大さ」といえるかもしれません。ぼくは、このプロジェクトを通じて、あたらしい自然環境のような景色をつくっていきたいと考えています。

今年(二〇一〇年)は二つの個展を実現させるとともに、ヴェネツィア・ビエンナーレで金獅子賞をいただくことができました。展覧会のいいところは、実際の建築とは違った可能性のなかでさまざまな実験ができることです。同時に、展覧会も実際の建築物も、デザインするからには、区別のつかないところまで追究しないと意味がないとも考えています。どちらにおいても、建築的思考を拡大する行為につながっていく心がけています。そういう意味では、ヴェネツィア・ビエンナーレで、国際的に認められたことは大きな励みになりました。

東京藝術大学で学ぶ学生の方にも、自由な価値観で軽やかに様々なことに取り組んでほしいと思っています。



いしがみ・じゅんや

1974 神奈川県生まれ / 2000 東京藝術大学大学院美術研究科修士課程建築専攻修了 /
2000-04 妹島和世建築設計事務所勤務 / 2004 石上純也建築設計事務所設立 /
2009 東京理科大学 非常勤講師 / 2010 東北大学 客員准教授
主な個展に「第11回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展」(2008)での個展、
「建築はどこまで小さく、あるいは、どこまで大きくひろがっていくのだろうか?」(資生堂ギャラリー・2010)、
「建築のあたらしい大きさ」(豊田市美術館・2010)がある。
2009「日本建築学会賞」を受賞。 / 2010「第12回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展」で金獅子賞を受賞。



この日のレッスン曲はラヴェルの《ラ・ヴァルス》。粕谷教授は舞うように学生を指導していく。レッスンを受ける長瀬賢弘さんと川崎翔子さんは現在博士後期課程に在籍。粕谷教授とは藝大入学前からの長いつきあいだ

藝大の教員たちが、
日々の研究やレッスンに動しむ
「研究室」のなかは
どうなっているのだろうか？
なかなか見る機会のない
部屋を潜入ルポする。

音楽学部器楽科 ピアノレッスン室 粕谷(多)美智子教授

Department of Instrumental Music, Piano Course
Professor KASUYA, Michiko

研究室探訪

第一回

Visiting the Laboratory

二〇一〇年十二月、冬晴れのある日の午前、上野キャンパス音楽学部一号館にある粕谷美智子教授のレッスン室を訪ねた。

粕谷教授は一九八九年から東京藝術大学音楽学部の非常勤講師となり、一九九六年からは助教授、二〇〇三年からは教授、そして二〇〇六年からは音楽学部附属音楽高等学校の校長も務めている。粕谷教授の藝大での教育活動は、大学、大学院及び附属高校でのピアノ実技指導のほか、大学院開設科目の器楽特殊研究の授業を担当している。

研究室にお邪魔した日は、大学院生に対する個人レッスンの日。粕谷教授の門下生（附属高校、学部、大学院の在校生十八人）が集う「Group美」が、年明け一月に催す発表演奏会（すみだトリフォニーホール）のため、二人の院生をこれから指導するところであった。この発表演奏会は今回で第二十二回を数えるというが、門下生たちが演奏のみならず、会場の確保やプログラムづくり、宣伝などを行っており、演奏以外のステージマネージメントの教育も同時に行うものとなっている。しかし、粕谷教授が、二〇一一年三月をもって退任されるため、「Group美」に於ける最終演奏会となる。

この日のレッスン曲は、モリス・ラヴェル作曲《ラ・ヴァルス》の二台ピアノのためのもの。この曲は管弦楽曲としてもよく知られているが、作曲者自身によるピアノ二台用やピアノ独奏用があり、二台ピアノ版は原曲の管弦楽版に先駆けて初演されているとのこと。

レッスンを受けるのはともに大学院博士後期課程に在籍している長瀬賢弘さんと川



崎翔子さん。長瀬さんは、プロコフィエフの研究とレッスンのためモスクワ音楽院にも在籍しているが、今回一時帰国したばかり。中学生のときから粕谷教授にレッスンを受け、ソロピアニストとしてすでに活躍中。川崎翔子さんも教授に師事して十五年以上。第五回安川加壽子記念コンクール第一位など数々のコンクールで優勝、入賞し、二〇〇七年からはソロリサイタルを行っている。今回の発表演奏会では二人がトリを務める。

レッスン室には二台のピアノが平行して置かれており、粕谷教授は、ピアノを前にした二人の院生の間に立ってレッスンをつけていく。「これからなにが起るんだろう」と、わくわくとした期待を抱かせるように「音量で示すのではなく、気持ちに先を盛り上げて」「体の中から、心の底から大きく三拍子を感じて」「体全体で大きな三角形を描くの」「感じたままでは足りない、何倍も強調しないと」「フランスの音楽だから、品性を保ちつつ」「縄跳びのまわっている縄に思い切って飛び込むような感じで」……。タイトルの《ラ・ヴァルス》はフランス語でワルツのこと。粕谷教授の指導そのものが華やかな舞踏を見ているようだ。

粕谷教授はピアノのレッスンを「技術に裏つけされたデッサンのうえに、さらに色をつけていく方法論を提案していく」ものだという。二人の大学院生は教授のことを「とても厳しいけれど、親身になって指導してくれる優しい先生」と口をそろえる。音楽に血を通わせるようなレッスンという印象を受けた。

上野の 寄り道 散歩道

第3回

「東京国立博物館庭園散策」

東京藝術大学がある上野は、歴史や伝統と新しい文化が交差するスポットとして、観光に訪れる人も多い。藝大のすぐ近くにも、由緒ある杜寺や老舗、意外なエピソードを秘めた穴場が目白押しだ。大学から少しだけ足を延ばして、小さな旅に出てみよう。



1 応挙館

天台宗寺院・明眼院の書院として建立され、東京品川の益田孝（鈍翁）の邸内に移築。その後東京国立博物館に寄贈、移築された。円山応挙が明眼院に眼病で滞留していた際に揮毫したとされる室内の墨画は、現在、作品保護のため複製画に差し替えられている。



2 六窓庵

慶安年間（十七世紀中頃）に奈良・興福寺慈眼院に建立された。明治の初めに博物館が購入し、解体輸送中に船が難破するものの、流失を免れた材を移築。第二次大戦中に再び解体され疎開していたが、戦後、数寄屋建築の名工木村清兵衛により現在地に再建。



東京藝術大学の南東に隣り合う東京国立博物館は、上野の杜のシンボルのひとつであり、注目すべき企画展や充実した常設展示でいつも賑わいをみせている。美術ファンのみならず「上野に行く」といえば、「トーハク（東京国立博物館の略称）で展覧会を鑑賞する」ことを思い浮かべる人も少なくはないほどだ。

東京国立博物館は一八七二年（明治五年）に創設された日本最古の博物館で、本館、表慶館、東洋館、平成館、法隆寺宝物館の五つの展示館と資料館などの施設からなる。観覧者のなかには展示を見てすぐ帰ってしまう人もいるかもしれないが、敷地内には、貴重な茶室をはじめ見落とせない古建築がいくつも点在している。

本館の北側に回り込んだ庭園はかつて寛永寺本坊の庭であったとされ、いまでは各地から移築された五棟の茶室が趣深いたたずまいをみせる。各茶室を西から順に紹介すると、「九条館」は、もと東京赤坂の九条邸にあった建物で、当主の居室として使われていた寄棟造り瓦葺きの建物。入母屋造り瓦葺きの「応挙館」は、尾張国（現在の愛知県大治町）・明眼院の書院だったときに円山応挙が揮毫したみごとな墨画で知られる。「六窓庵」は入母屋造り茅葺きで、慶安年

4 五重塔

高さ五七〇センチメートルの銅製の塔。最上部の相輪には龍が絡みつき、垂木、斗拱の組み物の細部まで入念に作られている。基壇に第五代將軍徳川綱吉が法隆寺に奉納した旨の銘文が線刻されている。



3 転合庵

小堀遠州が桂宮から茶入「於大名(おだいみょう)」を賜った折、その披露のために京都伏見の六地藏に建てたとされる。その後京都大原の寂光寺に移築され、一九六三(昭和三十八)年にゆかりの茶入とともに博物館に寄贈、移築された。



6 校倉

(重要文化財)

鎌倉時代に造られた一間四方の小さな「校倉」。奈良・元興寺の別院十輪院にあった建物で、内部壁面に大般若経ゆかりの菩薩や十六善神が描かれていることから、大般若経を納めた「経蔵」だったことがわかる。



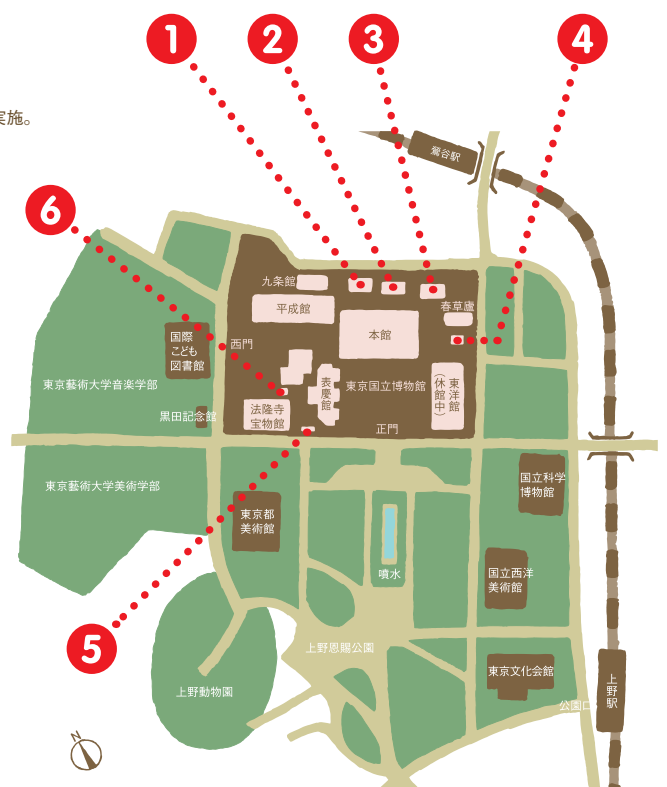
5 黒門

(重要文化財)

旧丸の内大名小路(現在の丸の内三丁目)にあった鳥取藩池田家江戸上屋敷の正門。大名屋敷表門としては東京大学の赤門と並び称される(土・日・祝日は開放。ただし天候により中止される場合もあり)。



*2011年の庭園解放日程:
「春」3月12日(土)~4月17日(日)、
「秋」10月29日(土)~12月11日(日)
上記庭園開放期間にかかわらず、
ボランティアによる「応挙館茶会」
「庭園茶室ツアー」を月に1~2回程度実施。
東京国立博物館ホームページ:
<http://www.tnm.jp/>
お問い合わせ:ハローダイヤル
Tel.03-5777-8600



間(十七世紀中頃)に奈良の興福寺慈眼院に建立された。席は金森宗和好みとされ、「大和の三茶室」と謳われたほどだという。「転合庵」は小堀遠州が京都伏見の六地藏に建てた切妻屋根瓦葺きの茶室で、本館裏から池越しにこの建物を望む景色は東博庭園のなかでも大きなみどころでもある。入母屋造り茅葺きの「春草廬」は河村瑞賢が建てた休憩所。近代の代表的な茶人である原三溪や松永安左工門(耳庵)が一時所有していたそう。庭園内にはほかに徳川綱吉が法隆寺に奉納した、高さ六メートル近い銅製の「五重塔」も建つ。庭園部分は通常公開はしていないが、春と秋の開放期間は自由に散策することができる。また、茶室は茶会・句会などに利用でき(要事前申込、有料)、ボランティアによる「応挙館茶会」「庭園茶室ツアー」を月に一回から二回程度実施しているということだ。

また藝大への道筋に面して建つ「黒門」と法隆寺宝物館の脇にある「校倉」は、国の重要文化財に指定されている。

上野の杜の 波瀾 万丈

述懐される軍楽隊での活動

軍楽生徒は掃除、点呼、朝食の後、全天候型と称し、毎朝午前中は戸外で直立不動にて楽器を持ったまま精神訓話を聞き、楽器練習(高澤談)。しもやけの痕は今も(石津談)。午後は二時間の楽器練習に始まり、体操、学課、軍事訓練等。夕食後の十時までが自習で、四か月後には《軽騎兵序曲》《分列行進曲》などが吹けるまでになった(團筆)。

述懐される軍楽隊の日々——「陸軍では第一種兵器が銃と剣、第二種兵器が喇叭、第三種兵器が軍楽器とされておりまして……兵器であり大元帥陛下から賜った神聖なものゆえ、わが命を捨てても守らねばならぬ」という楽器は「Made in U.S.A.」芥川筆。実際には米国製は例外で、軍楽隊生徒が用いる楽器の大部分は日本管楽器株式会社(ニッカン)製であった。「生徒の間は一年先輩にぶん殴られっぱなしで、自分や芥川のような背の高い者から順に殴られた。

第十一回

東京音楽学校生の陸軍軍楽隊入隊 後篇 橋本久美子

昭和十九年十月、陸軍戸山学校軍楽隊に入隊した東京音楽学校生十四名。戦後日本の音楽史を彩った音楽家たちが証言する戦時下の軍楽隊の日々。

それが卒業した途端に大事にされ、連日、東京千葉、山梨など各部隊の慰問や任官の宴会などに引つ張り回された。レコーディングもあり、出張で貰う大量の饅頭、砂糖、羊羹を土産に持ち帰った(石津談)。「演奏に行った先で酒樽の底を叩かされたこともある」(北爪談)。「譜面を書く仲間がパート譜を書いて、大編成で音を出してくれる。移調を間違えるとすごい響きになる。これが後で大変役に立とうとは」(斎藤筆)。

昭和二十年の陸軍記念日すなわち三月十日、前夜からの大空襲にもかかわらず、軍楽隊は例年通り靖国神社に参拝し、神田須田町↓日本橋↓銀座通り↓日比谷へと吹奏行進した。その戸山学校も四月十三日深夜から翌日未明の大空襲に見舞われ、懸命の消火活動にもかかわらず大方焼失し、軍楽生徒一名が焼夷弾の直撃を受け即死した。五月二十八日、十九年度生は焼け跡で卒業式を迎えた。首席で教育総監から銀時計を授与された芥川をはじめ、音校生は成績上位で卒業した。翌日、浅草橋の日本橋高女(現日本橋女学館)に移転する。

敗戦当日、教育総監部内で機密兵器の減去、機密書類・対米対ソ書類・人事関係書類の焼却、御真影と勅諭の奉焼等が決定される。八月十七日の本部では明日にも連合軍上陸とのデマが飛び交い、書類を焼く煙と無数の軍人軍属の怒鳴り声で騒然としていた(山口筆)。翌十八日には軍楽隊でも日本橋高女の校庭の焼却炉で重要書類や軍隊手帳を焼却し、校舎屋上で隊員たちが泣きながら見守る中、御真影を奉焼した(高澤談)。

戦中の東京音楽学校

では学徒出陣以降の音校はどうであったか。

十八年十一月、仮卒業式で「元ヨリ明日ノ生命アルヲ頼マズ」と校長壮行の辞。十二月、第百一回定期演奏会。これにてしばし中断。

十九年一月、入学者選抜にあたっては徴兵年齢の低下に合わせ若年を優先的に合格させることのないよう文部省より通達。六月、除隊後に学年三分の二以上を経過していれば学年修了と文部省より通達。しかし終戦直後にこれ

が適用され学校生活を奪われたまま繰り上げ卒業となった方々の無念は痛切である。「再び学校に戻って勉強できるのを楽しみにしていたが、そのまま卒業となったのが今でも残念」(北爪談)。「何が何だか判らないうちに卒業させられてしまった」(團筆)。九月、卒業式の校長式辞は音楽にひと言も触れず「今や皇国存亡の危急」。十一月、東部七八五部隊が兵器被服等格納に学校建物を使用。「軍楽隊で休みをもらい、音校の様子を見に行ったら音もなく空き家のように異様な静けさだった」(沼田談)のはこれ以降か。二十年六月、東部第二部隊が分教場を、七月には運輸省本省が本校校舎を使用。学食「キャッスル」が宿直や軍関係者の食事を作ったと二代目主人の福本豊氏は語る。

音校の昭和十九年度概算要求は「甲種師範科年限延長と増募」を筆頭に、国防上防空と水中聴音に必要な「音感教育研究施設」、日本音楽による大東亜共栄圏内諸民族の指導に喫緊の「国民音楽文化研究所施設」を記し、年限延長を実現させた。時局と折り合いつつ存続と充実を図った音校の姿が浮かび上がってくる。

十四名の華々しい戦後

軍楽隊を経た十四名の戦後は――芥川也寸志
 Ⅱ管弦楽、映画音楽、CM作曲、うたごえ運動、
 新日本交響楽団結成、日本音楽著作権協会理事
 長。石津憲一Ⅱバリトン、愛知県立芸術大学名
 誉教授。伊藤榮一Ⅱ終戦翌年トロンボーン専攻
 で再入学。編曲、指揮。現役の合唱指揮者。東
 京学芸大学名誉教授。内田富美彌Ⅱトランペッ
 トのテクニクが抜群だったと高澤評。奥村一
 Ⅱピアノと吹奏楽を結びつけた作品で吹奏楽界
 に貢献。梶原完Ⅱピアニスト、本学助教を経てベッ
 ツドルフ(独)のアドルフ音楽院教授。北
 爪規世Ⅱ読売日本交響楽団のヴィオラ首席奏
 者。齋藤高順Ⅱ航空自衛隊航空中央音楽隊長、
 警視庁音楽隊長。代表作《ブルーインパルス》、
 小津映画「東京物語」。鈴木良一Ⅱ京都市立芸
 術大学で後進の指導。團伊玖磨Ⅱオペラ《夕鶴》
 《素戔嗚》、交響曲、歌曲、著作『パイプの煙』
 等。沼田元一Ⅱ北海道教育大学名誉教授。早川
 博二Ⅱ歌謡曲と吹奏楽等作曲、トランペット奏
 者、指揮者。萩原哲昌Ⅱ《スーダラ節》《いい湯
 だな》等クレージーキャッツのほとんどの曲を
 作編曲。藤島義勝Ⅱ都留文科大教授。
 軍楽隊の件は戦時下の東京音楽学校の一場面
 にすぎない。国策から生徒個人個人の経験に至
 るまで掘り起こしてはじめて、全体像の解明に
 近づくであろう。

(はしもと・くみこ／音楽学部講師)

注
 1 前編で藤島氏の専攻がオーボエとあるのは軍楽生徒になつて
 からで、音校ではピアノです。お詫びして訂正します。

2 前編写真1のキャプション中、本校以外の音校生吹奏の件は、
 武蔵野音楽大学総務課と国立音楽大学校史編纂室の協力によ
 り、面校とも戦前には管楽器専攻生は在籍しないが、管弦楽演奏
 やブラスバンドの慰問演奏を行っていることが判明しています。



1. 音校の軍楽生徒も加わった昭和20年陸軍記念日(長田暁二『日本軍歌全集』音楽之友社 昭和51年)。地面が濡れているのは雨ではなく、大空襲時の消火活動で使われた大量の水が靖国神社の坂下を集まったため(高澤談)。同書掲載の写真は左右反転しており(谷村政次郎他指摘)、今回が本来の写真である



5



4



2
3

2. 裏庭に防空壕を掘る(昭和16年 畑中良輔名誉教授提供)
3. 女子生徒の執銃訓練(昭和16年 畑中良輔名誉教授提供)
4. 軍事教練 遭遇戦(昭和17年7月 軽井沢)
5. 奏楽堂に取り付けられた見張り台。宿直教員、甲種師範科生徒等が交替で敵機襲来を見張った

次号予告

「日本美術の保護」 吉田千鶴子

日本の古美術の破壊、散逸状況に敢然と挑み、
 全国調査、研究、保護制度づくり、学術的修理
 に大きく貢献した岡倉天心・東京美術学校の活
 動を振り返る。

Concert

Information

展覧会 & 演奏会
情報

TOPIC 1

香り かぐわしき名宝

Fragrance - the Aroma of Masterpieces

4月7日から5月29日まで、本学大学美術館において「香り かぐわしき名宝」展が開催されます。

6世紀、仏教伝来とともに日本人は香木を焚くことを知りました。以来、日本では「香り」を仏教文化、貴族文化、武家文化、庶民文化のなかで育み、世界に稀な香りの文化を生み出してきました。本展は、香りにまつわるさまざまな美術作品を紹介しながら、目に見えない香りの魅力を、人間の五感や想像力を頼りに味わっていただくというものです。

本展は、「香りの日本文化」「香道と香りの道具」「絵画の香り」という3つの大きな柱で構成されます。「香りの日本文化」は2章にわけて、古代から近代までの日本人と香りとのかわりを名宝の数々を通じて概観します。「香道と香りの道具」では室町時代以降、茶道、華道とともに独特な発展をとげた香道の世界を選びすぐった香道具を中心に史料を交えて紹介します。そして、「絵画の香り」では、江戸から近代にかけての絵画作品のなかから、＜描かれた香り＞をテーマに精選した名作を展示いたします。

右：速水御舟「夜梅」
1930年（昭和5）東京国立近代美術館所蔵
（全会期展示）

下：鈴木春信「梅の枝折り」
江戸時代 18世紀 山種美術館所蔵
（展示期間4月7日～5月8日）



展覧会スケジュール（2011年2月10日現在の情報です。今後予告なく変更することがございます。）

大学美術館本館

4月7日（木）～5月29日（日）	芸大コレクション展 - 春の名品選	入場料：一般300円 学生100円（中学生以下は無料）
4月7日（木）～5月29日（日）	「香り かぐわしき名宝」展	入場料：一般1,300円 学生800円（中学生以下は無料）
6月7日（火）～6月19日（日）	海外の日本美術品の修復 在外日本古美術品保存修復協力事業	入場料：無料
7月2日（土）～8月21日（日）	うらめしや〜、冥途のみやげ 一全生庵・三遊亭圓朝 幽霊画コレクションを中心にー	入場料：一般1,000円 学生600円（中学生以下は無料）
7月5日（火）～8月21日（日）（予定）	区長賞創設30周年記念 台東区コレクション展（仮称）	入場料：無料
9月9日（金）～9月25日（日）（予定）	平成本「源氏物語絵巻」（仮称）	入場料：未定

陳列館

5月 9日（月）～6月20日（月）	「中国現代美術の断面」ほか（仮称）	入場料：未定
6月24日（金）～7月10日（日）	木島教授企画展（仮称）	入場料：無料
7月（未定）	日本画第2研究室「素描展」（仮称）	入場料：無料
8月30日（火）～9月11日（日）（予定）	日本画第1研究室 ICHIKENTEN（仮称）	入場料：無料
9月（未定）	島田教授企画展（仮称）	入場料：無料

正木記念館

4月29日（金・祝）～5月12日（木）	彫刻展示室（田中記念室）開室	入場料：無料
---------------------	----------------	--------

※ 開館時間は、10:00～17:00（入館時間は16:30まで）。
ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌日に休館することがあります。
なお、展覧会によっては、開館時間および休館日が異なる場合がございますので、その都度ご確認ください。

※ 展覧会の名称・会期については、変更することがございます。

※ 本学には駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。

※ 展覧会についてのお問い合わせ先

● ハローダイヤル TEL：03-5777-8600
● 大学美術館 TEL：050-5525-2200

※ 展覧会の紹介は、下記ウェブサイトでご覧になれます。
<http://www.geidai.ac.jp/museum/>

Exhibition &

演奏会スケジュール（2011年2月10日現在の情報です。今後予告なく変更することがございます。）

奏楽堂

4月 9日(土)	同声会新人演奏会 <第1回> 古楽・ピアノ・弦楽器 <第2回> 邦楽・管打楽器・声楽	13:00開演 18:00開演	2,000円 (第1回・第2回共通券)	自由席
4月15日(金)	創造の杜 藝大 現代音楽のタベ	19:00開演	2,000円	自由席
4月28日(木)	藝大フィルハーモニア新卒業生紹介演奏会	18:30開演	1,500円	自由席
5月 7日(土)	「元禄～その時、世界は？」江戸の音風景～歌舞伎と文楽	<レクチャー> 15:00～ <コンサート> 16:30開演		
5月11日(水)	室内楽コンサート第1日	11:00開演	2,000円	自由席
5月14日(土)	室内楽コンサート第2日	14:00開演	2,000円	自由席
5月15日(日)	「元禄～その時、世界は？」琳派の美、ロココのころ	<レクチャー> 15:00～ <コンサート> 16:30開演		
5月27日(金)	学生オーケストラ定期演奏会	19:00開演	1,500円	自由席
6月 4日(土)	弦楽シリーズ フェリックス・アーヨの「四季」	15:00開演	2,000円	自由席
6月10日(金)	藝大フィルハーモニア定期演奏会	19:00開演	2,000円	自由席
6月12日(日)	上野の森オルガンシリーズ	15:00開演	2,000円	自由席
6月18日(土)	学長と語ろう区 ゲスト：片岡護(イタリアンシェフ)	15:00開演	無料(事前申込制)	指定席
6月28日(火)	学生オーケストラ プロムナード・コンサート	11:00開演	無料	自由席
6月30日(木)	藝大ブラス学内演奏会～ソウル大学ブラスを迎えて	19:00開演	無料	自由席
7月 2日(土)	藝大とあそぼう 子どもの歌はだれのもの？	15:00開演	入場料未定	自由席
7月 3日(日)	東京藝大チェンバーオーケストラ定期演奏会	15:00開演	1,500円	自由席
7月14日(木)	管打楽器シリーズ D.ヨナスとW.フックスを迎えて	19:00開演	2,000円	自由席
8月 6日(土)	時の響き	15:00開演	3,000円	指定席
9月 8日(木)	和楽の美	18:30開演	3,000円	指定席

モーニング・コンサート	4月21日、5月12日、19日、26日、 6月2日、23日、30日、7月7日、14日(いずれも木曜日)	11:00開演	無料(要整理券)	自由席
-------------	--	---------	----------	-----

※ 詳細につきましては、3月下旬発行予定の「平成23年度コンサートスケジュール(前期版)」をご覧ください。

※ 演奏会の曲目、開演時間などの詳細については、決定次第、大学ホームページで発表いたします。
<http://www.geidai.ac.jp/>

※ 本学には駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。

※ チケットの取り扱い

- 藝大アートプラザ TEL: 050-5525-2102
- ヴォートル・チケットセンター TEL: 03-5355-1280
- チケットぴあ TEL: 0570-02-9999
(一部携帯電話・PHS・IP電話はご利用いただくことができません。)
- 東京文化会館チケットサービス TEL: 03-5685-0650

※ 「学内演奏会」の日程については、下記までお問い合わせください。

- 音楽学部教務係 TEL: 050-5525-2309

※ 演奏会についてのお問い合わせ先

- 演奏芸術センター TEL: 050-5525-2300
- 音楽学部附属音楽高等学校 TEL: 050-5525-2406

TOPIC 2

和楽の美



「和楽の美」2010年公演「邦楽絵巻 南都の夢—悟空ひとり旅」より

「和楽の美」は毎年9月上旬、演奏芸術センターと邦楽科が手を携えて開催する演奏会で、その特徴は邦楽科各専攻の粋を取り払った横断的なコラボレーションにあります。それは時には邦楽というジャンルさえ飛び越え、洋楽との相互浸透など、従来の邦楽演奏会では味わえない新鮮な体験に満ちています。

さらにそのコラボレーションは音楽学部内だけにとどまらず、美術学部との共同作業も大きな見どころのひとつです。昨年は、平城遷都1300年の公式マスコット“せんとくん”の生みの親、籾内佐斗司教授がデザインした孫悟空など、ユニークなキャラクターが登場する「南都の夢—悟空ひとり旅」が上演されました。今年はその続編が予定されています。

◆「豊かな感性 強い日本へ」

文化庁長官と芸術系大学学長（首都圏及び国公立）によるシンポジウム

十二月二十一日、本学美術学部絵画棟大石書室において、文化庁長官と首都圏および国公立芸術系大学学長によるシンポジウム「豊かな感性 強い日本へ」が開催された。これは、文化審議会文化政策部会において「文化芸術の振興に関する基本的な方針」（第三次基本方針）が審議されていることに伴い、文化芸術の振興を通じた国力の強化に向けて、芸術系大学が果たすべき役割とその可能性について検討することを目的に実施されたもの。

シンポジウムは、近藤誠一文化庁長官、宮田亮平学長、久世建二金沢美術工芸大学学長、堤剛桐朋学園大学学長のほか、二十六におよぶ芸術系大学の学長らが出席するなか行われ、芸術系大学、地域、官公庁など多種多様な組織間のネットワークを構築し相乗効果を生み出すことや、人々の持つ「感性」を育む教育体制のあり方などについて活発に意見が交わされた。

最後に、取りまとめられた意見をもとに、文化庁と芸術系大学の連携や芸術系大学相互の連携の一層の強化などをうたった「政策提言」が宮田学長より発表され、近藤長官に手交された。



芸術系大学学長からの政策提言
「豊かな感性 強い日本へ」

長い歴史の中で培われた、日本独自の繊細な感性と磨き上げられた匠の技、そして思いやりの心は、第二次世界大戦後の荒廃をも乗り越え、奇跡的な経済成長を成し遂げる素晴らしい力となった。

しかし、経済的な成長が進むにつれ、日本が持っていた文化の素晴らしさは徐々に失われ、近年では将来の展望を描くことすら困難な状況にある。

そもそも文化とは人間の営み全てを包摂する概念であり、我々は、心が十分に育つてこそ科学や経済の花が咲くことを再認識し、心豊かな社会を実現しなければならない。

また、文化芸術は様々な活動における新たな付加価値の源泉であり、持続可能な成長が求められる現代にはもっとも相応しく、創造性や感性豊かな人材の育成は、芸術家に限定されることなく「強い日本」の実現のための喫緊の課題といえよう。

このため、芸術家や芸術活動を支える人材の育成を使命とする芸術系大学は、我が国の文化芸術の発展に積極的に貢献することを目指し、以下の政策を提言する。

一 文化芸術の社会との連携を推進し、我が国の文化芸術の創造、発展、継承を担う人材の育成を強化すること

二 文化政策を推進するため、大学等の研究機関による文化芸術に関する調査研究の充実を図ること

三 我が国の特色ある文化芸術を世界に発信し、国際文化交流を活性化すること

四 本シンポジウムを契機として、芸術系大学相互のネットワーク作りや、文化庁と芸術系大学との連携に加え、初等中等教育における芸術教育に関しての連携についても一層強化すること

平成二十二年十二月

News 2010.08 - 2011.01

交流

◆大学間国際交流協定締結

七月九日、カタール・ニヤ工科大学バルセロナ建築学部（スペイン）と本学美術学部建築科は、建築、都市デザインとそれに関する芸術の交流を深めるとともに、教育および研究に関する協力をを行うことに合意し、芸術国際交流協定を締結した。

一月十一日、アアルト大学工学部建築学科（フィンランド）と本学美術学部建築科は、建築、都市デザイン、ランドスケープデザインに関する芸術の交流を深めるとともに、教育および研究に関する協力を行うことに合意し、芸術国際交流協定を締結した。

これらの調印により、本学における交流協定締結校は、十七か国（地域）、四十八大学などとなった。

出版会活動

◆DVD「映画専攻 第四期生修了作品集 二〇一〇」を十一月十六日より発売

二〇一〇年三月に修了した映画専攻第四期生。短篇、長篇と数々の制作実習を重ねてきた学生たちが、その集大成として取り組んだ修了制作五作品を、今年もDVDとして発売。

収録される作品は、在学中に沢木耕太郎のルポルタージュ集「人の砂漠」を、豪華キャスト陣出演で映画化して話題となるなど、今後の活躍が期待される監督たちの作品群である。



東京藝術大学出版会の出版物などは、藝大アトリプラザ、アマゾン（ネット販売）および一般書店にて取り扱っております。詳しくは、藝大アトリプラザ（〇五〇—五五二五—二一〇二）まで

受章・受賞

◆吉村誠司准教授が「再興第九十五回院展」内閣総理大臣賞を受賞

美術学部絵画科日本画の吉村誠司准教授の作品「祭壇（バリ島にて）」が、「バリ島の祭壇を主題としながら、作者独特のモザイク模様でさまざまな夢や印象がちりばめられた楽しさにあふれる作品」と評され、再興第九十五回院展において内閣総理大臣賞を受賞した。

◆前田宏智准教授が「第三十九回伝統工芸日本金工展」で朝日新聞社賞を受賞
美術学部工芸科彫金の前田宏智准教授の作品「銅打出金銀彩花器」が、第三十九回

伝統工芸日本金工展において朝日新聞社賞を受賞した。

◆松下計准教授と八木澤優記非常勤講師が「ディスプレイデザイン賞 2010」優秀賞を受賞

美術学部デザイン科の松下計准教授と八木澤優記非常勤講師が総合「ディスプレイ展」が、ディスプレイデザイン賞 2010において優秀賞を受賞した。

◆松下計准教授が「CSデザイン賞」準グランプリを受賞

美術学部デザイン科の松下計准教授が「ディレクターを務めた作品『COLOR STUDY』が、CSデザイン賞において準グランプリを受賞した。

◆塚原康子教授が「第二十七回田邊尚雄賞」を受賞

音楽学部楽理科の塚原康子教授の著書「明治国家と雅楽—伝統の近代化／国楽の創成」（二〇〇九年、有志舎刊）が、東洋音楽の分野において優れた研究成果を対象とする第二十七回田邊尚雄賞を受賞した。

◆東京藝術大学が「最優秀学校賞」を受賞

カナダで開催されたオタワ国際アニメーションフェスティバルにおいて、学生の作品三作が入選するなど、本学大学院映像研究科における人材養成が高く評価され、東京藝術大学に「最優秀学校賞（Best Animation School Showee）」が贈られた。

◆古田亮准教授が

「第三十二回サントリー学芸賞」を受賞
大学美術館の古田亮准教授の著書「俵屋宗達—琳派の祖の真実」（二〇一〇年、平凡社刊）が、「俵屋宗達の魅力を一般の読者に語りながら、絵画の見方の変化を見事に浮かび上がらせた優れた業績である」と評され、第三十二回サントリー学芸賞を受賞した。

◆平成二十二年「藝祭」

九月三日から五日まで、「Planet Arts」をテーマに「藝祭」が開催された。

初日には

美術学部・音楽学部の一年生らがひと夏かけて作り上げた八基の神輿が、サンバ隊を先頭に上野公園を練り歩いた。また学内では、三日間にわたって展示・演奏会・模擬店などさまざまなイベントが催され盛大な賑わいをみせた。



◆「藝大アーツイン 東京丸の内」

十月二十六日から三十一日まで、「藝大アーツイン 東京丸の内」が丸ビルで開催され、期間中の六日間で一万七〇〇名を超える来場者を迎えた。

本学と三菱地所株式会社が共同主催する「藝大アーツイン 東京丸の内」は、本学の若い才能により、丸の内からさまざまな文化・芸術を発信していくイベント。四年目となる今年は、近藤誠一文化庁長官の挨拶で華々しく開幕。続く宮田学

長、直野資声楽科教授、高橋明也三菱一館美術館館長による鼎談をはじめ、美術、音楽、映像のコラボレーションで、連日多彩なプログラムを展開し、丸ビルに登場したお客様を魅了した。



◆学長と語ろうⅧ

奏楽堂トーク&コンサート

十一月二十日、第八回「学長と語ろう 奏楽堂トーク&コンサート」が、ゲストに俳優、コメディアン、画家やボクサーなど多方面でご活躍の片岡鶴太郎さんを招いて開催され、約一〇〇〇名の来場者が約二時間にわたり対談と演奏会を楽しんだ。

第一部は〈命あるもの〉片岡鶴太郎さんを迎えて」と題し、片岡さんの「赤い椿」との運命的な出会いから画家を目指したこと、俳優やコメディアンなど全ての活動の基本に「ものまね」があること、さらには宮田学長と共通する文字へのコンプレックスが過去にあったことなどが、随所にもまねや漫談を交えながら語られ、来場した観客を楽しませた。

第二部では、対談のお礼としてコンサートが開かれ、吹奏楽によるルイ・プリマ「シング・シング・シング」や、バグパイプを取り入れた中村克己編曲「バグパイプファンタジー」など、バラエティーに富んだプログラムによる演奏が会場を魅了した。演奏後に登場した片岡さんは、周囲のリクエストで指揮に初挑戦するなど最後までなごやかな催しとなった。



◆第五回 藝大アートプラザ大賞展

十一月二十三日から十二月十九日まで、第五回「藝大アートプラザ大賞展」(テーマは「呼吸」)が、藝大アートプラザにて開催された。

これは、学生の制作活動の成果を広く社会に発信するため平成十八年度から実施している学内アートコンペで、厳正な審査を経た入賞作品を展示、販売するもの。五回目を迎えた今回は、四十四名(九十一名)の応募があり、そのなかから選ばれた四十一名(八十二名)の作品が会場の藝大アートプラザを飾った。



藝大アートプラザ大賞を受賞したのは、大学院美術研究科修士課程工芸専攻(漆芸)に在籍する玉川みほのさんの作品「けろり」。

◆藝大フレンズ加入者状況

加入者数(平成二十三年一月三十一日現在)
賛助フレンズ 個人一三一一名 法人五団体

特別賛助フレンズ 個人一六名

◆今年度下半期に開催された主な展覧会、演奏会記録

《大学美術館》

シャガール・ロシア・アヴァンギャルドとの出会い 交錯する夢と衝動

会期 七月三日〜十月十一日

入場者数 二〇万七一九九名

明治の彫塑 ラグーザと萩原碌山

会期 十月二十三日〜十二月五日

入場者数 一万三三三三名

黙示録―デューラー/ルン

会期 十月二十三日〜十二月五日

入場者数 一万三六一二名

《奏楽堂》

藝大21 和楽の美

邦楽絵巻「南都の夢 悟空ひとり旅」

開催日 九月九日

入場者数 七五三名

藝大オペラ定期第五十六回

「イル・カンビエロ」

開催日 十月九日、十日

入場者数 八四五名、八四七名

ピアノシリーズ第五回「響」

ピアノとオーケストラのための作品

開催日 一月十日

入場者数 一〇五四名

第22号刊行にあたって

「東京藝術大学の価値は人にあり」という視線で、これまでおもに人に焦点を当てたりリニューアルを進めてまいりましたが、第22号においても引き続きその精神を踏襲しさらなるリニューアルを実施しました。

今号から2つの新連載が始まっています。ひとつは名だたる卒業生の方々に現在のご自分のお立場と大学時代に考えていたことや営んでいたことがどう影響しているのかをお訊ねする「卒業生に聞く」というコーナーで、初回は建築専攻を修了された石上純也氏にご登場願いました。もうひとつは「研究室探訪」と題し、日頃うかがい知ることのできない各研究室での指導風景を潜入レポートするもので、こちらの初回は、音楽学部器楽科でピアノの指導を行っている粕谷美智子教授のレッスン風景を取材させていただきました。どちらも大変興味深い内容に仕上がっておりますので、ぜひお楽しみください。

藝大通信編集長
松下 計

展覧会・演奏会の最新情報は、東京藝術大学公式 Web サイト (<http://www.geidai.ac.jp/>) をご覧ください。

●展覧会についてのお問い合わせ

東京藝術大学大学美術館
Tel. 050-5525-2200
NTT ハローダイヤル
Tel. 050-5777-8600

●演奏会についてのお問い合わせ

東京藝術大学演奏芸術センター
Tel. 050-5525-2300

●演奏会チケットの取り扱い

藝大アートプラザ
Tel.050-5525-2102
ヴォートル・チケットセンター
Tel.03-5355-1280
チケットぴあ
Tel. 0570-02-9999
(一部携帯電話・PHS・IP 電話はご利用いただくことができません。)
東京文化会館チケットサービス
Tel. 03-5685-0650

●藝大アートプラザのご案内

Tel. 050-5525-2102

東京藝術大学広報誌 藝大通信 No. 22 MARCH 2011

編集発行 東京藝術大学藝大通信編集部